

宇喜多家史談会会報

第 92 号
令和 6 年 10 月 17 日

宇喜多家史談会
〒700-0826
岡山市北区磨屋町六一二八
光珍寺気付

亀山城跡周辺の戦国時代の逸聞(九)

中西 厚

【草ヶ部の万灯会】

亀山城の所在する沼地区(旧沼村)の北隣地の草ヶ部地区(旧草ヶ部村)には、歴史的由緒や遺跡が多く伝わっている。「草ヶ部」の地名は、日本の各地が「国」・「郡」・「郷」の三段階の行政単位にされた奈良時代に、当地が備前国上道郡日下郷であったことに由来している。日下郷(くさかごう)の郷名は、倭国形成期(古墳時代)の名代の部である「日下部(くさかべ)」の一個所であったことに基づいていると判断されているが、郷の設置はこの地が当時の税である「租」の主要対象地であったことを物語っている。名代の部での認識が強まって、中世になると「部」が加わって「草部郷(くさかべごうと音読か?)」あるいは「草可部郷」と、さらに江戸時代には「草ヶ部村」と表記されるようになったものであろう。

草ヶ部地区の集落の沖(東側)の平地には広い範囲に、奈良時代に行われた農地区画の条里制による一町四方の地割りが今日まで踏襲されており、その内には「一ノ坪」・「四ノ坪」・「八ノ坪」・「十ノ坪」・「十四の坪」等々の、口分田の小区画名が小字名となっており、前記の郷たる所以を反映している。さらに、背後の山並みには奈良時代より前の古代山城跡である大廻・小廻山城跡があり、国指定史跡となっている。

時代が下がって戦国時代になると、亀山城との関わり合いが多々あり、前稿で当地の名刹築地山常楽寺と羽柴秀吉との関わりの伝承には、岡山藩の藩とした宇喜多直家の毀誉褒貶により、直家の業

績が置き換えられているとの観点を提起し、起源が定かでないと考えられている草ヶ部の万灯会も、その一つではないかとした。

草ヶ部の万灯会は、草ヶ部町内会の年中行事の一つとして、月遅れのお盆、八月十三日・十四日・十五日に行われており、草ヶ部大池の一〇〇メートルに及ぶ土手が催し場となっている。町内会の各家々から大人や子供が願いや思いを込めて描いた額行灯を、土手の転落防止策に支柱を立て付けて掲げ、点灯している。百個近い点灯された額行灯の並びは壮観で、宵闇の溜池の水面に映る灯明は幻想的に万灯会の雰囲気を高めている。十五日には、築地山常楽寺の住職が読経を上げて精霊送りを行い、万灯会を終える。

宇喜多直家と万灯会については、宇喜多直家の毀誉褒貶を行って梟雄に仕立てた岡山藩政の許でも、戦死者を弔う信仰心に篤い真つ当な人間像に記載されていて、地誌類に「湯迫の万灯会」として掲載されている。「湯迫の万灯会」の歴史的経緯に関しては、宇喜多家史談会の会長であられた柴田 一先生が、会報第五号の「湯迫の万灯会と明禪寺合戦」の記事で詳述されているので、万灯会の個所だけを抜粋して転載させて頂いた。

【湯迫の万燈会の伝統】

龍口山の南麓の湯迫に万燈会という行事が伝えられてきた。平成の現代では額行燈の奉納の形にまで変化したが、大正十年(一九二一)編『上道郡誌』によると、毎年七月に十三日・十四日・十五日の夜、高柱を立て左右または四方に綱を張り、それに提灯を吊して点火したり、松明に火を点けて行列するなど、村の子ども行事として伝えられている。

宝永六年(一七〇九)高木太亮軒が著した『和氣絹』によると、湯迫・脇田をはじめ四・五村の村民数十人が出合い、七月十四日・十五日の午後六時頃から、手に手に松明を持ち、東西の麓から湯迫山の峰に登って、互に松明を合せた。これを湯迫の万燈会というがその起源は分からないという。